

氏 名	金澤悦子
学 位 の 種 類	博士（看護学）
学 位 記 番 号	第9号
学位授与年月日	平成28年3月18日
学位授与の条件	学位規程第3条第4項該当
学 位 論 文 題 目	疾病管理を用いた虚血性心疾患患者への看護支援プログラムの開発
論 文 審 査 委 員	主査 武田 淳子 副査 塩野 悦子, 山田 嘉明

論文の要旨

【目的】

経皮的冠動脈インターベンション（Percutaneous Coronary Intervention：PCI）を実施した心不全リスクステージBの虚血性心疾患患者に対して、重症化を予防することを意図して看護職が継続した患者教育を行うための看護支援プログラム（以下、プログラム）を開発し、その運用可能性を検討することを目的とした。

【方法】

疾病の重症化を予防する疾病管理の考え方や虚血性心疾患関連ガイドラインをもとにプログラムを開発した。プログラムの構成は、疾病管理の構成要素に基づいて、リスク階層化、アセスメント、患者教育とモニタリング、分析評価とした。患者の冠危険因子のデータに基づくリスク階層化からアセスメントを経て患者教育内容を抽出する過程には、表計算ソフトを活用したシートを独自に作成し、適用した。

平成25年2月～26年9月の期間に、研究同意が得られた循環器診療施設において、虚血性心疾患に罹患しPCIを実施した心不全リスクステージBの患者を対象として、看護職である研究者がプログラムに沿った看護支援を実施した。対象への介入期間は6か月間とし、抽出された患者教育内容に沿って電話や郵送、面談にて継続的な教育とモニタリングを実施した。

プログラムの評価については、アウトカム指標を身体計測値・検査データの改善、自己効力感の向上、行動変容による冠危険因子の是正とし、プログラム介入群と非介入患者の対照群に対して、入院中（介入前）・3か月（中間評価）・6か月（最終評価）に身体計測値・検査データの評価と質問紙調査を実施し、2群間で比較した。プログラム介入に関しては、最終評価時に、介入群患者を対象に自記式質問紙調査を実施した。また表計算ソフトを活用して作成したシートの画面展開と操作性の評価について、循環器内科病棟看護師を対象に自記式質問紙調査を実施した。

本研究は宮城大学看護学部・看護学研究科倫理委員会と研究協力施設の倫理委員会の承認を得て実施した。

【結果】

プログラムの対象者は介入群20名（ 63.7 ± 10.8 歳）、対照群20名（ 67.5 ± 11.9 歳）であった。身体計測値・検査データでは2群間で有意な差は認められなかったが、6か月間のデータは両群ともに正常・標準値を維持していた。介入群の自己管理行動では、入院中（介入前）と6か月の最終評価において有意に得点が上昇した（ $p=0.011$ ）が、対照群では有意に低下した。自己効力感や行動変容では2群間に有意な差は認められなかった。介入

群患者によるプログラム介入に関する評価では、6 か月間の期間は「適当」、プログラムは「必要」、電話や郵送による連絡方法・郵送による結果の提示は「良い」、総合評価は「良い」の肯定的回答を示していた。また、循環器内科病棟看護師による表計算ソフトを使用したシートの画面展開と操作性等に関する評価では、項目内容、アセスメントの考え方、必要な患者教育内容の抽出、リンク機能では肯定的回答を示していたが、図表や見やすさ、操作性は否定的回答を示していた。

【結論】

患者データのリスク階層化からアセスメントを経て抽出された患者教育内容に沿って、入院中から外来へと6 か月間の継続した看護介入を実施することにより、患者の冠危険因子の是正を示す生理学的データは悪化せず正常範囲内で推移し、自己管理行動が促進された。以上より、開発した看護支援プログラムは、PCI 後の虚血性心疾患患者の動機づけを高め、重症化予防に有用と考えられ、その運用可能性が示唆された。

審査結果の要旨

本学位論文の目的は、経皮的冠動脈インターベンションを受けた心不全リスクステージ B の虚血性心疾患患者に対して、冠危険因子を是正し、重症化を予防することを意図した継続的な患者教育を実施するための看護支援プログラムを開発し、その運用可能性を検討することである。本研究は、1) 看護支援プログラムの開発、2) 看護支援プログラムの患者への適用、3) 看護支援プログラムの評価、の3段階で実施された。看護支援プログラムは、おもに米国で導入されている疾病管理プログラムのプロセスに沿って構成され、患者のデータに基づいて冠危険因子の特性に応じたリスク階層化を図り、アセスメントを経て個別に選定された教育項目に沿って6 か月間の継続的な患者教育を実施し、モニタリングした結果をフィードバックするという一連のプロセスを通して、患者の自己効力感の向上、自己管理行動の促進及び冠危険因子の是正を目指すものである。開発された看護支援プログラムの適用においては、研究協力施設の循環器外来に通院する患者を介入群20名と対照群20名の2群に分け、身体計測値・検査値ならびに自己効力感、QOL、自己管理行動等の質問紙調査結果について2群間の比較を行った。その結果、6 か月の調査期間を通して身体計測値及び検査値では2群間に有意な差は認められず、冠危険因子の改善は認められなかったものの正常範囲内で推移していたこと、対照群においては、自己管理行動得点が有意に低下したことなどから、看護支援プログラムによる継続的な看護介入の有用性が示唆された。

本研究で開発された看護支援プログラムは、患者データによるリスク階層化からアセスメントの過程に表計算ソフトを活用し作成されている点に独創性・新規性があり、臨床現場での汎用性、発展性があると認められ、審査委員全員が高く評価した点である。

この学位論文について2回の対面審査を行い、以下の指摘がなされた。①疾病管理プログラムを用いた先行研究との比較から、本看護支援プログラムの特徴やオリジナリティを明記すること、②教育支援プログラムの全容を明示し、構成を分かりやすく記述すること、③患者への介入経過について、介入方法と内容を明記すること、④統計処理の結果を適切に記述すること、⑤表計算ソフトを活用したリスク階層化からアセスメントまでの画面展開や操作性について、看護師に実施した調査結果をプログラム開発過程に適切に位置付けること、などであった。その後、上記の指摘事項についての論文修正が確認された。

本学位論文は、心不全リスクステージ B の虚血性心疾患患者に対して、患者の健康レベルの回復や重症化への予防を図るために、患者データによるリスク階層化からアセスメントの過程に表計算ソフトを活用し、看護職による継続的な患者教育を実施するための看護支援プログラムを開発したものである。開発された看護支援プログラムは新規性、独自性を有しており、看護実践における実用可能性、発展性が期待できることから、審査委員会は、博士（看護学）の学位を授与するにふさわしいものであることを認めた。